

「第5回高山市協働のまちづくりフォーラム」実施報告書

1. 目的

地域課題の解決に向けたまちづくり協議会、市民活動団体等、様々な主体の協働の促進

2. 実施日時及び会場

令和2年1月26日 日曜日 13:30~16:40 (開場 13:00)

高山市役所 地下市民ホール

3. 参加者

区分	参加者数(人)	備考
まちづくり協議会	48	参加団体数 16
市民活動団体	36	参加団体数 15
市職員	25	
市議会議員	5	
一般市民	5	
その他(報道、社会教育委員)	2	
合計	121	(前回比+39人)

4. プログラム

(1) 市民憲章朗唱

(2) 主催者あいさつ

(3) 趣旨説明

(4) 市内の協働事例の紹介

○ワイワイカフェ(乳幼児教室)

大八まちづくり協議会とNPO法人飛騨高山わらべうたの会の協働事業

○久々野地域大学連携事業

久々野まちづくり運営委員会と多摩大学の協働事業

(5) 市民活動団体等の活動PRタイム

(6) 市民活動団体等の展示による活動紹介(休憩)

(7) 基調講演

【演題】行事から事業へ、役から経営へ、現場づくりからひとづくりへ
-小規模多機能自治を進化し続けるために-

【講師】IIHOE [人と組織と地球のための国際研究所] 代表者

兼 ソシオ・マネジメント編集発行人 かわきた ひでと 川北 秀人 氏

5. 内容

プログラム（４）市内の協働事例の紹介

○ワイワイカフェ（乳幼児教室）

（大八まちづくり協議会・

NPO 法人飛騨高山わらべうたの会）

大八地区は地区内に児童センターがなく、まちづくり協議会で乳幼児教室を開催していたが、専門的なスキルが必要で、スタッフの負担が大きいという課題があった。また、NPO 法人も遊び場を必要とする母親のニーズがある一方で、地域への広報が弱いという課題があった。

今回、両者が協働することで、お互いの課題を解決すると共に、参加者の満足度向上や新しいつながりの可能性を見出すことができた。



【質疑応答】

- ・ 定例化していく見込みはあるか。

⇒来年度以降は月 1 回で継続していく方針で計画している。

- ・ 参加者はどのくらいか。

⇒初回は 1 組の参加。SNS 等を活用し発信した結果、徐々に増加し、最終回は 12 組の募集だったが、お断りしなければいけないほど多くの方に参加いただいた。

- ・ かかった費用、参加費はとったか、費用はすべて補助金だったのか。

⇒9 万 4 千円（チラシデザイン費、消耗品等 ※人件費は無し）かかり、市の補助金制度を活用した。参加費はゼロだが、予算を超えた経費は大八まちづくり協議会に支出していただいた。

- ・ 発信の方法・工夫したところは。

⇒参加者にどうやって知ったか聞いたところ、「高山市 遊び場」等で検索した際に、わらべうたの会の SNS につながり、そこから大八地区で開催していることを知り、申し込んだとおっしゃっていた。

⇒SNS の強みは一気に拡散するところ。最初の 1 組のお母さんが発信した SNS がきっかけで来た人もいた。そうした方の発信がきっかけで拡散され、参加者が増えた。SNS の広報の作り方は簡単で、自分も若い人に聞きながら発信している。

- ・ 子どもがいなくても参加できるか。

⇒子育てをしている世代が地域とのつながりを大切にしていることから、今後は世代間交流にも力を入れていきたい。

- ・ 補助金なしでも続いていきそうか。

⇒地域の中の子育て親子と繋がることは未来づくりだと考えている。補助金がなくても、まちづくり協議会の予算や参加費をいただくなどして、継続していきたい。

【講師講評】

- ・ 地域の中で同じような活動をしている人のマップやカレンダーを作成し、情報を地域で共有

してみてもは。

- ・パパママカフェの開き方講座をしてみてもは。やってほしい人だけでは地域が持たないので、自分たちでできる人たちを増やすことをやってみても良い。
- ・お母さんが情報を探すのではなく、お母さんが選べば良い状態を作ると良い。

○久々野地域大学連携事業

(久々野まちづくり運営委員会・多摩大学)

町時代に作成した「お宝マップ」の改訂に伴い、大学連携センターに相談したことがきっかけで多摩大学と連携するようになった。大学生の提言から地域の情報発信について連携するようになり、地域では住民主体の実行委員会を組織し、取り組み、大学生は年2回来高し、アドバイス等を行っている。大学生は地域でのアクティブラーニングとして事業に関わっており、情報発信分野だけではなく、特産品開発や地域の中学生と大学生の交流等にも連携が広がっている。



【質疑応答】

- ・ **実行委員会の年齢層・年齢比率は。**
⇒商工会の青年部、農家の若い方に声をかけており 30～40 代の若い方が主である。また、成人式の実行委員会に声を掛けて 20 歳前後の方にも入っていただいている。
- ・ **大学生は何人ぐらいが何日来高するのか。**
⇒1 回あたり 20～40 人で 2 泊 3 日。
- ・ **学年で言うと何年生で、継続性があるのか。**
⇒学校では選抜試験があるようだ。何回か来る人もいれば初めての人もいる。学年は 1 年生から院生もいるなどバラバラである。
- ・ **まちづくり協議会として次に取り組みたい課題はあるか。**
⇒現在は情報発信の仕組みづくりに取り組んでいるが、来年度はお宝マップの改訂版を発行し、久々野の人たちに久々野のことを知ってもらい、発信してもらうように取り組んでいきたい。

【講師講評】

- ・あるものを伝える情報発信は大事。次は課題解決のための人材育成を考える必要がある。
- ・課題解決の人材育成を考えたときに大学生よりも高校生だと思う。
- ・高校が地域の求心力を生むような人材育成が重要

プログラム（５）市民活動団体等の活動 PR タイム

発表団体 計 9 団体（発表順）

- 特定非営利活動法人 飛騨高山わらべうたの会
- 高山オカリナアンサンブル
- 認定 NPO 法人まちづくりスポット
- 特定非営利活動法人ブラーマ・クマリス
高山教室（高山ピースパレス）
- 特定非営利活動法人 活エネルギーアカデミー
- 高山市民防災研究会
- ひだ地域リハビリプロジェクト
- Family Planet Japan
- 一般財団法人 飛騨高山大学連携センター



プログラム（６）市民活動団体等の展示による活動紹介（休憩）

上記の 9 団体に下記の団体を加えた計 12 団体

- おはなしネット・ことだま
- ともときファーム 高山ウリス
- 飛騨高山整膚癒しの会 相合愛



プログラム（７）基調講演

【演 題】

行事から事業へ、役から経営へ、
現場づくりからひとづくりへ
-小規模多機能自治を進化し続けるために-

【概 要】

○変化に応じた進化が必要

- ・平成の 30 年間で日本は変化している。

①家族が小さくなった。

- ・ 1985 年国勢調査で一番多い世帯は 4 人世帯
⇒ 2015 年国勢調査で一番多い世帯は一人世帯
- ・ 世帯でできることが減り、一人あたりの負担が大きくなっている。

②働き方が変わった

- ・ 1・2 次産業で働く人よりも 3 次産業で働く人が多くなった。
- ・ サービス業で土日とも休みの人は 2 割程度で、土日に行事をしてもらっても若者は参加できない。



③高齢化が「第2幕」を迎えた

- ・日本は1970年から「高齢化社会」で、現在は「超々高齢社会」
(※国連は高齢者率7%で「高齢化」、14%で「高齢」、21%で「超高齢」と定義しているとのことだが、昨年9月時点で日本は28%突破)
- ・これからは、まちづくりの主役である前期高齢者が減少する。
⇒高齢化と人口減少、社会の変化が進んでいるのに、組織が同じではうまくいかなくなる。

その変化の中でまちづくり協議会に必要なこと

- ・地域づくりの基礎を、行事(イベント)から事業(生活必須サービス)に転換する。
- ・行事を増やすのではなく、地域の担い方を変える。
- ・地域の行事・会議を可能な限り「重ねる」「間引く」ことで負担軽減。
- ・暮らしの変化に応じた進化をしていく。

○「“まち”づくり」は「人“交”密度」を高めること

- ・「まち」は人間と人間の関係(の豊かさ)を指す。
(町←区域、街←建物の集まり)
- ・昭和までは、人口も子どもも増え続け、家族・親族で働く一次産業が主力であり、家を超えた交流が必要だった。
しかし、一人世帯が増える現在は、イベントより支え合いが必要。

(事例)長崎市鶴の尾地区:入院お助け袋

身寄りのない町内会員の入院時に、必要物品をまとめた袋を提供。

→退会者がいなくなった。「命と暮らしを守るために自治会があるのなら入る」



○課題解決先進地になるにはチャレンジが必要

- ・3つの「てみる」(決めてみる、やってみる、だめならやり直してみる)にやさしい地域は人が増える、または減るスピードが遅くなる。

○地域特性を踏まえた活動が必要

- ・地域ごとに人口構成を分析。分析することで10年後、20年後の地域の状況が分かる。
- ・地域の特性を踏まえて力を入れる活動を考える必要がある。

○地域づくりと子どもたちの可能性育成をシンクロさせる

- ・地域の課題と可能性を分かる子どもたちを育てることが大事。
(事例)北海道浦幌町:小中学生が農畜漁林業の生産・販売を体験し、
町長に提言するまちおこし授業
- ・これからの高山を担うのは今の小中学生。どういったチャレンジをしてもらいたいのかは地域でしか教えられない。
- ・まちづくり協議会が守るものは「地域の命と暮らし」、攻めるものは「未来の価値づくり」

【質疑応答】

・ 役員の考え方を変える突破口は

⇒まず行事と会議と組織の棚卸しをやってもらいたい。地域の組織・部会が1年にやっていることの一覧表を作り、それを基に「重ねる」「間引く」を行う。まずは、地域の総会を1日でやってみてはどうか。

また、住民の人口見通しを見せる。次に、全住民調査を実施し、これからの活動を考えることが必要。島根県雲南市では、中学生以上の全住民に意見を聞いて、若い世代、おばあちゃんの見聞も集めている。地域づくり計画は絶対作った方がいい。そうでないと同じことの繰り返しになってしまう。

・ 大学の無い本市へのリターン率を上げるには

⇒基本的には中学・高校との連携しかない。帰ってこないのは、地域に仕事がないからではなく、地域の可能性と課題を知らないの、どうしたらよいか分からないから。浦幌では市外の高校へ進学した人が「浦幌部」を作り、高校生が浦幌の魅力を伝えている。

中高生に地域の課題を正直に見せることと、人足として使わないで、どう解決するかということを知っていく、一緒に作っていくことが重要。

・ 元気高齢者を増やすには

⇒人を手伝ったことに対する報償があると良い。地域活動に参加した人にさるぼぼコインをプレゼントなど、インセンティブを与えて動いてもらう。

・ 買い物支援と介護要望の具体的な方策

⇒まち協で日曜市をやってみては。地域の中でお金を回すことに結びつけてもらいたい。雲南市のある地区では、自分たちで持ち寄りでお店を運営し、交流も買い物もできる。住民がつくったものを販売しているため、住民に現金収入が発生する。また、年金が地域の中で回り、生きがい（好きなこと、得意なこと、世間から必要とされること、稼げること）も生まれる。

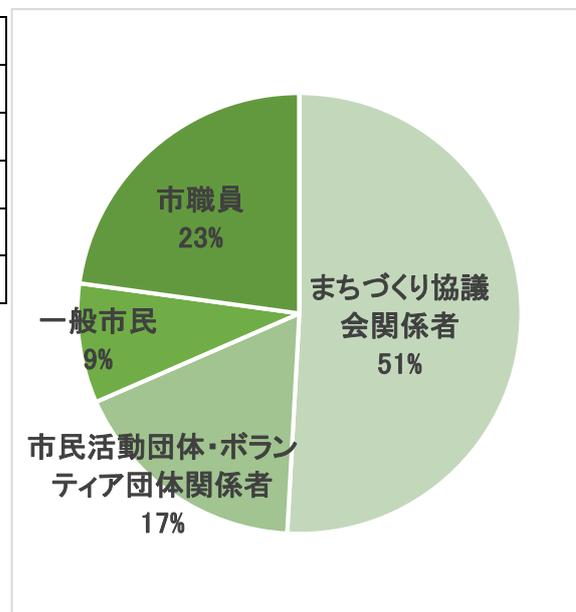
富山県南砺市ではまち協は地域住民にお金を回す仕組みを作ってもらっている。まち協がもらったお金を使っているだけでは、住民にプラスが生まれてこない。そこに経済の観点をいれていくと、高齢者が元気になるだけでなく、ちょっと実入りも入るようになる。

6. アンケート結果

【回答者】 57 人 【回収率】 47.1% (回収 57 件 / 参加者 121 人)

【問 1】 回答者の種別

回答者	57
まちづくり協議会関係者	29
市民活動団体・ボランティア団体関係者	10
一般市民	5
市職員	13
その他	0

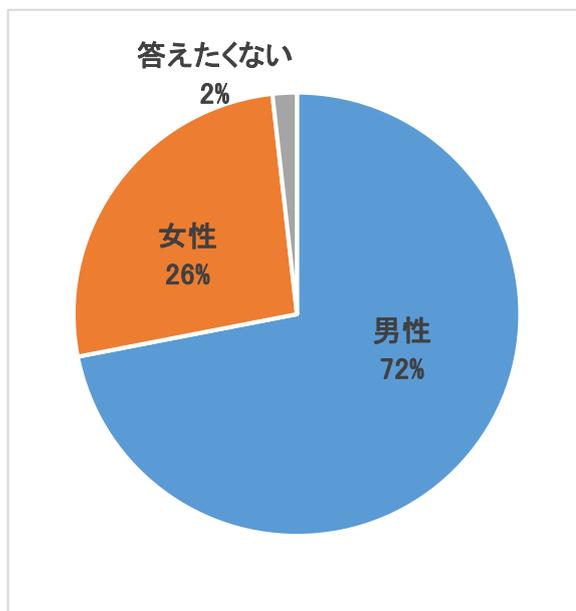


【前回（第 4 回）との比較】

- ・ 市民活動団体、一般市民、市職員の参加者数が増加。

【問 2】 回答者の性別

回答者	57
男性	41
女性	15
答えたくない	1

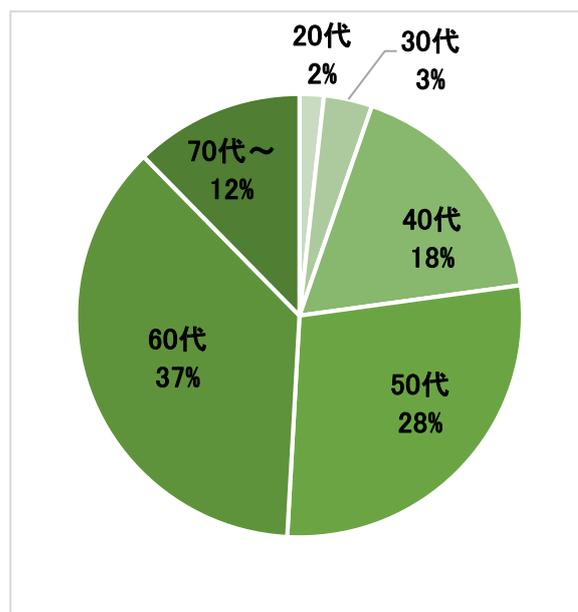


【前回（第 4 回）との比較】

- ・ 男性の参加者が多い傾向は変化なし。

【問3】回答者の年齢

回答者	57
10代	0
20代	1
30代	2
40代	10
50代	16
60代	21
70代～	7

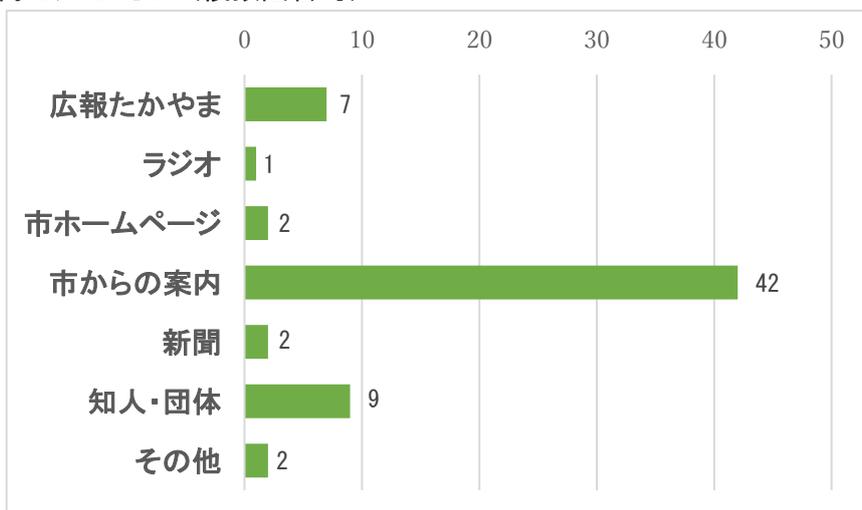


【前回（第4回）との比較】

- ・60代の参加者数が増加。
- ・それ以外の年代は変化なし。

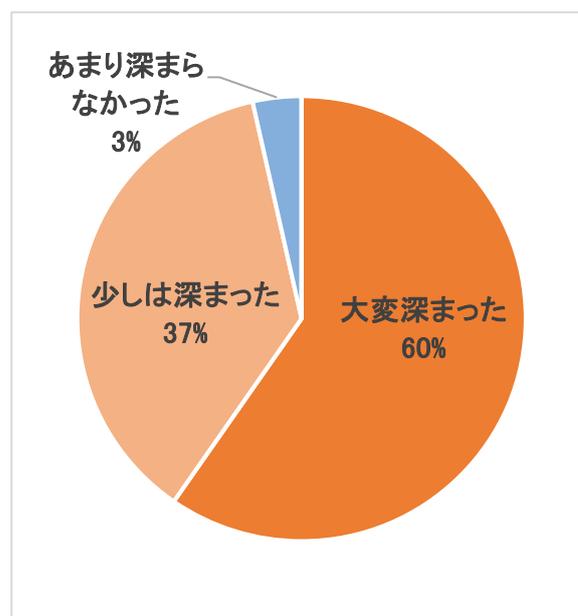
【問4】今回のフォーラムを何で知ったか（複数回答可）

回答数	65
広報たかやま	7
ラジオ	1
市ホームページ	2
市からの案内	42
新聞	2
知人・団体	9
その他	2



【問5】フォーラムに参加してまちづくり協議会と市民活動団体等との協働について関心や理解が深まったか

回答者	57
大変深まった	34
少しは深まった	21
あまり深まらなかった	2
まったく深まらなかった	0

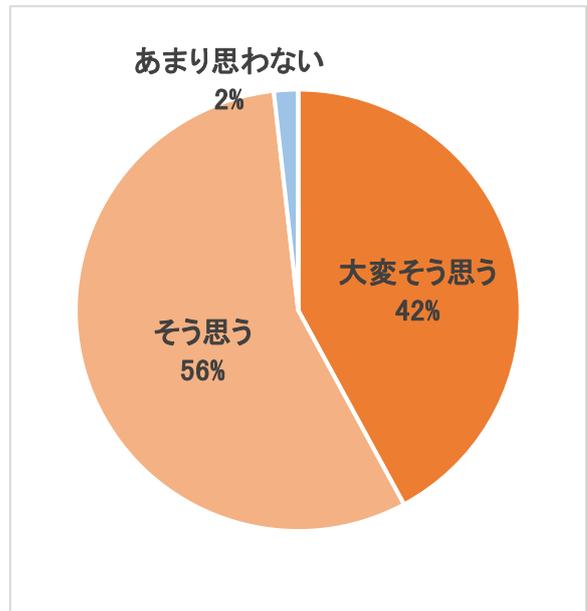


【前回（第4回）との比較】

- ・「大変深まった」と回答した人の割合が15%以上増加。

【問6】今後の活動に際し、他団体と協働して取り組んでいこうと思ったか

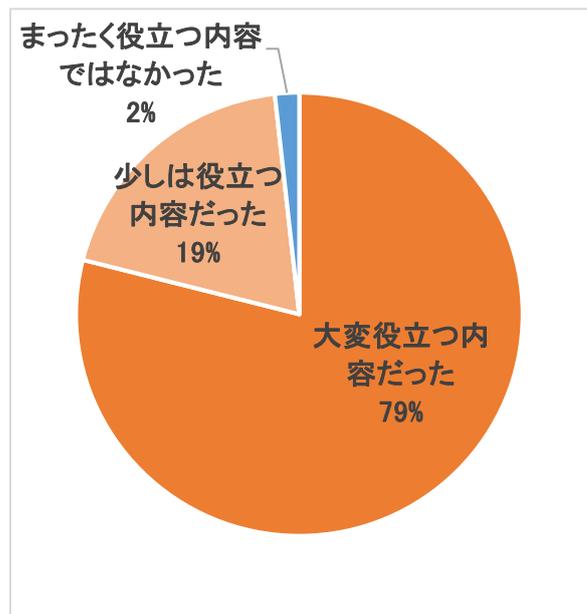
回答者	57
大変そう思う	24
そう思う	32
あまり思わない	1
まったく思わない	0
活動していない	0



※今回からの設問の為、比較は無し

【問7】フォーラムの内容は、今後の活動等に役立つ内容か

回答者	57
大変役立つ内容だった	45
少しは役立つ内容だった	11
あまり役立つ内容ではなかった	0
まったく役立つ内容ではなかった	1



【前回（第4回）との比較】

- ・「大変役立つ」と回答した人の割合が約20%増加。

【その理由（自由記述）】

※協働推進課で内容を要約・抜粋しています。

（役立つと回答された方の主な意見）

協働の必要性・取り組み推進に関すること

- ・まち協との協働のヒントとなる内容が得られた。
- ・市民活動団体と次の協働のきっかけができたことが一つの収穫だった。
- ・当事者だけで考え行動するより、他の団体やグループと協働することにより、課題の解決につながりやすいことが良く理解できた。
- ・どんな団体があるか、繋がることができるか絶えずアンテナをはっておくことが大切だと感じた。
- ・大学の連携はいろんな分野で今後ますます必要となる。

団体運営・活動の見直しに関すること

- ・まちづくりの意味がよく分かった。何ができるか考えてみたいと思った。
- ・まち協のめざす方向性を改めて確認できた。
- ・まち協活動の目的について再認識できた。
- ・まち協の取り組むべき内容について非常に参考になった。
- ・まち協の活動内容を再検討する必要性を感じた。
- ・次につなげていく体制作りが大切であり、そのために負担軽減を図ることが重要であると学ぶことができた。
- ・地域（集落・町内会）の人口構成によってまちづくりの方法を変えていかなければならない。
- ・まち協の活動内容を再検討する必要性を感じた。
- ・毎年毎年、前年事業の焼き直し+更に新たなイベントということに疑問を感じていたので、大変勉強になったし、未来のために行動を起こしていきたいと思った。
- ・まちづくり協議会の見直しを考えさせられた。
- ・未来を見据えた活動を考える。進化を続けることを頭において考えたい。

その他

- ・高山市の財政力 財政を使わなくても良い方法…介護予防の必要性
- ・間引く、重ねる→漠然と想っていたことをズバツと教えてくださった。
- ・地域と子ども（住民）のつながりを大切にする。子どもからの提言を大切に。

(役立たないと回答された方の意見)

未記入

【問8】 今回のフォーラムについてのご意見や、今後取り上げてほしいテーマ・内容など、ご自由にお書きください。（自由記述）

※協働推進課で内容を要約・抜粋しています。

今後取り上げてほしいテーマに関すること

- ・防災や自治体とまち協の関係などいろいろな課題を取り上げて続けていただきたい。
- ・地域と学校の連携について取り上げてほしい。
- ・課題解決に関わる話を聞いてみたい。
- ・全住民調査の方法
- ・全住民アンケートの活用の方法

講師に関すること

- ・川北先生の話は分かりやすく、端的なのでまた聞きたい。
- ・定期的に川北先生の講演を聞きたい。

フォーラムの形式・運営に関すること

- ・もう少しフランクにしてはどうか。
- ・フリーWi-Fiを用意してもらえると実際にその場でやってみることができると思う。
- ・活動の発表時間が短すぎないか。

感想

- ・手遅れにならないうちに手を打たなければならないと思った。